

戦争と卒業生

戦争体験をいまに伝えるOB 取材し、書籍化をめざす学生

戦後63年が経ち、戦争を体験した人たちが年々減少していく中、現在の学生たちが戦争体験を聞く最後の世代とも言われている。そんな中、戦争の実態を伝えるOB、それを取材する学生たちがいる。戦争の事実を伝えたいと体験記を自費出版したOBの吉田外儀さん。一方、OB・OGの戦争体験を取材し、書籍化をめざしているFLP松野良一ゼミの活動を紹介する。

学生記者 池内真由 || 法学部4年

戦争体験を自費出版した83歳のOB

『太平洋戦争とわが家』で語り継ぐ

吉田外儀さん（1925年生まれ、1949年経済学部卒）は、中央大学専門部商学科在籍中に三島野戦重砲兵第二連隊に入隊、軍隊生活を送った経験をもとに、今年3月に『新編 太平洋戦争とわが家』（文芸社）を自費出版した。7人いる孫たちに、戦争の事実を伝え、その悲惨さを知ってもらうためだ。

同書は、275ページで全8章。中央大学専門部時代に陸軍の訓練場で一週間泊りがけで行った

野営や、飢えや暴力に苦しんだ過酷な軍隊生活の最中、再会した中央大学の学友に大豆をもらったエピソードなどが書かれている。ほかにも、戦死した兄、儀忠さん（享年23歳）の思い出などが平易な文章でつづられている。

吉田さんは、短歌でも戦争体験を伝えている。

「戦より還らぬ友の紅顔がまた浮かびくる 惜別の歌」（注：学徒出陣の時、中央大学予科生が鳥崎藤村の詩に作曲し、学友間の送別歌となった）

「陸軍少尉儀忠戦死の文字悲し享年二十三歳尚なほ悲し」。戦死して少尉に昇進した兄のことを歌ったものだ。

「戦争は始まったら、それだけで地獄です。私は事実を伝えることが一番の反戦活動になると思っていました。若い人には、事実を知ってほしい。知っていたら戦争という道を選択するはずはないですから。一人でも多くの在学生に読んでもらえたらと思っています」

いまの学生たちに、吉田さんはこうメッセージを送ってくれた。

書籍の購入は、中央大学生協や、Amazon (<http://www.amazon.co.jp/>) などインターネットでできる。〈新編は、『太平洋戦争とわが家』（北国新聞社 2004年）、『太平洋戦争とわが家



吉田外儀さん（右）と妻の邦子さん



入隊前の記念撮影

増補ノート』(シヨセキ 2006年)を加筆・修正したものである

「戦争を生きた先輩たち」を記事にまとめる

FLPジャーナリズム松野良一ゼミ

戦争を語り継ぐOBがいる一方で、戦争を体験したOBを取材している学生たちがいる。FLPジャーナリズムプログラム松野良一ゼミの希望者約40人で、法、経済、商学、文、総合政策の学部生たちだ。

ゼミ生らは、取材した記録の一部を原稿にまと

め、中央評論08年春号に特集「戦争を生きた先輩たち いま後輩へ伝えたいこと」というタイトルで掲載した。一つのゼミが中央評論の特集を寄稿したはじめてのことだ。

特集では、取材した特攻隊員の婚約者だった方をはじめ、特攻隊員やシベリア抑留、学徒出陣の経験を持つ方々や、元ジャーナリストらの戦争体験が掲載されている。

取材は昨年度から始まり、地方各地にも出かけ、取材したのはこれまでに約50人のOB・OGにのぼる。直接の聞き取り取材だけでなく、時には取



編集打ち合わせをする松野ゼミのゼミ生

材対象者を見つけるため、20年前の学員名簿を頼りに新聞記者やテレビ局関連の人をピックアップし、当時の郵便番号5桁を7桁に変える作業を続けながら、146通もの手紙を書いて戦争責任について調査した。

同ゼミで、「戦争を生きた先輩たち」プロジェクトの統括を務めるのは、法学部3年の宮川知久さん。「取材するまでは、ニュースを見ても、戦争と言ふものにリアリティを感じられなかった。

小泉、安倍政権の時の靖国神社参拜問題で、戦争というものについても一度考えてみたいと思っただんです」というのが取材をはじめたきっかけだ。

宮川さん自身は、中国の日本軍占領地で玉音放送を放送した杉田敏男さん(戦時中、北支唐山放送局日本語アナウンサー)を取材。「実際に取材を重ねていくうちに、戦争を一個人の経験から見直すことができました。それまでは歴史教科書で何万人が死亡などと書いてあるのをみても実感できなかつたけれど、体験者から聞くことで、戦争の悲惨さというものがより深く理解できるようになりました」という。

同ゼミのプロジェクトチームでは、さらに軍隊経験のない女学生、疎開した学童などに対象の幅を広げて取材を行うなど、書籍化を目指して活動を続けている。